# 坂谷遺跡

－県営ほ場整備事業（保内地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１２
新潟県長岡市教育委員会

坂谷遺跡

２０１２　新潟県長岡市教育委員会

# 坂谷遺跡

－県営ほ場整備事業（保内地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１２
新潟県長岡市教育委員会

# 例　言

1. 本書は、新潟県長岡市両高（和島地域）に所在する、坂谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、県営ほ場整備事業（保内地区）に伴い、平成 22 年に長岡市が新潟県長岡地域振興局から委託を受けて実施したものである。
3. 調査に要した経費は、事業主体者である新潟県長岡地域振興局が 90％を負担し、農家負担分の 10％を長岡市が国庫補助金及び新潟県費補助金を受けて負担した。
4. 発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組合せにより表記する。遺構番号については、遺構の種類ごとに通し番号を付した。

   P（ピット）、SD（溝）
5. 出土遺物の注記は、「ＳＹ」とし、この後に出土地点・出土遺構を記した。
6. 本書で用いた座標値は、平面直角座標系第Ⅳ系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高であらわす。
7. 発掘調査及び整理作業は、長岡市が指導のもと、株式会社太陽測地社に一部業務を委託した。
8. 本書の執筆は小林が行い、遺物実測及びトレース、写真撮影、遺構等のトレースを株式会社太陽測地社が請け負った。
9. 調査・整理体制は、以下のとおりである。

（平成 21 年度）確認調査

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査主体 | 長岡市教育委員会 | 教育長 | 加藤　孝博 |
| 事務局 | 長岡市教育委員会科学博物館 | 館　長 | 山屋　茂人 |
| 調査担当 | 長岡市教育委員会科学博物館 | 主　任 | 丸山　一昭 |

（平成 22 年度）発掘調査

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査主体 | 長岡市教育委員会 | 教育長 | 加藤　孝博 |
| 事務局 | 長岡市教育委員会科学博物館 | 館　長 | 山屋　茂人 |
| 調査担当 | 長岡市教育委員会科学博物館 | 主　任 | 小林　徳 |
| 調査補助員 | 株式会社 太陽測地社 | | 藤井　秀明 |
| | 株式会社 太陽測地社 | | 吉田　希美 |

（平成 23 年度）整理作業

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査主体 | 長岡市教育委員会 | 教育長 | 加藤　孝博 |
| 事務局 | 長岡市教育委員会科学博物館 | 館　長 | 山屋　茂人 |
| 整理担当 | 長岡市教育委員会科学博物館 | 主　任 | 小林　徳 |
| | 株式会社 太陽測地社 | | 中山　優子 |

# 目　次

例言

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 ・・・

# 第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

## 1　調査に至る経緯

県営ほ場整備事業（保内地区）は、農業生産性の向上や農地集積の促進、経営体の育成確保を目的とした事業で、農地の大区画化や排水路・暗渠の設置、農道の整備等を行うものである。対象地域は和島地域北西部の水田およそ 150ha、着工年度は平成 14 年度から平成 23 年度である（第２図）。

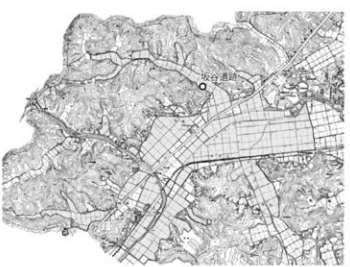
寺村光晴により発見されていた坂谷遺跡（寺村 1950）は、弥生時代から古墳時代と奈良・平安時代にかけての遺跡である。確認調査地は過去に遺物が表採され遺物包蔵地として周知されていた。また、周辺にも国指定史跡の八幡林官衙遺跡を始め幅広い時代の遺跡が存在することから、さらに遺跡の時代・範囲が広がる可能性があった。これらの状況を踏まえ、ほ場整備事業の地域内での範囲確定と周辺での未周知の包蔵地の確認が必要であるため、新潟県長岡地域振興局（以下、「振興局」）から同年９月 17 日付け長振農第 3431 号にて文化財保護法第 94 条第１項に規定されている埋蔵文化財発掘の通知が市教育委員会

第１図　遺跡位置図（1/200,000）

を通じて新潟県教育委員会（以下、「県教委」）にされ、10月7日付け教文第867号にて県教委から確認調査が必要との通知がなされた。

県教委からの通知を受け、事業者の振興局と市文化財保護部局の長岡市教育委員会（以下、「市教委」）は協議を持ち、この協議により市教委が平成21年10月に試掘・確認調査を実施した。確認調査の結果、第8トレンチにおいて土坑状の落ち込みと、砂岩製砥石などが検出され、同年12月21日付け長教博第289号にて市教育委員会は調査成果の終了を県教委に報告した。

この調査成果と過去の表採状況を踏まえ、市教委は振興局と協議を行い、遺構・遺物が検出された第8トレンチ周辺の排水路の掘削部分約200㎡にて発掘調査を行い記録保存することとし、平成22年5月6日、振興局と長岡市は県営ほ場整備事業（保内地区）における坂谷遺跡及び同事業内にて周知された吉沢遺跡の発掘調査に関する協定書を締結し、調査期間・費用負担割合など基本的事項を定めた。すなわち発掘調査は平成22年度、整理作業は平成23年度に実施すること、費用負担割合について調査費の90％を振興局、10％を長岡市とするなど9項目である。同年5月28日には平成22年度の発掘調査費用負担契約を振興局と締結した。また、同年5月10日付け長振農第3101号文書では振興局から発掘調査の実施依頼があり、市教委が実施する旨を回答した。市教委は同年6月25日付け長教博第101号文書で、文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の着手を県教委に報告、7月2日から発掘調査を開始した。



第2図　事業実施位置図（1/40,000）

## 2　調査の経過

（1）確認調査（第3図）

平成21年10月30日、排水路掘削部に任意の調査トレンチを設定し試掘調査を行った。8Tにおいて、大型で扁平な砂岩製の砥石を伴った遺構が検出された。このトレンチの上層では古墳時代と思われる土師器の小片も数点出土した。遺物包含層は確認されなかったが、各トレンチにおいて黒色の泥炭層あるいは茶色の植物遺体層と青灰色砂層が互層をなして存在しており、湿地帯の時期と洪水とが繰り返されていたことが推察された。なお、これらの確認調査の結果は市教委刊行の市内遺跡の発掘調査報告書にて報告されている（丸山　2010）。

第3図　試掘調査トレンチ位置図（1/4,000）

（2）本調査

平成22年7月2日、調査区の設定を行いバックホウによる表土除去を開始した。翌週の5日から調査区のグリッド杭の打設をおこない、現在ある農業用水路をはさみ、東西それぞれを「東地区」「西地区」と称した。この調査区の形状に沿って任意のグリッドを設定し、それぞれのグリッドを公共座標と対応できるようにした。2C及び2E～2Iまでのグリッド点の公共座標値、標高を第1表に記載する。

調査は東地区から発掘作業員により調査区内排水のための溝及び包含層の掘削を開始した。翌日より確認調査にて遺構・遺物が検出された深さまで人力にて掘削したところ、東地区でいくつかの不定形な落ち込みが確認されたため、用途不明であるがトレンチを設定して移植ゴテなどにより慎重な調査を行った。結果、東地区では山裾の屈曲部から急激に落ち込む地形となっており、これらの場所に厚く堆積し、ときに植物遺体や炭化物を多量に含んだ黒色もしくは茶色の層から多くの遺物が出土した。他の層からも少量の遺物が出土したが、この層が包含層であることを確認した。また、調査を通じてこれらの落ち込みが人為的なものではなく、自然にできたものであると考えられた。また、1Jグリッドにおいて平安時代と見られる土器が出土し、時期不明であるが溝SD1とピットP1が検出された。7月20日からは西地区においても包含層掘削を開始したが、2Bグリッド以西は水分を含んだ荒い砂質の層で崩落の危険がある地層であり、周辺からも包含層が確認されなかったため、安全面を考えて掘削を中止した。西地区においても東地区の続きと見られる落ち込みが確認できたが、遺物・遺構等は検出されることはなかった。

7月26日に航空測量のための清掃作業を行い、翌27日に航空測量を実施し同時に完掘写真を撮影した。28日には一部深くまで掘削した部分を壁面の崩落を防ぐ目的で埋め戻し、発掘調査を終了した。

調査終了後、振興局から事業内における排水路の位置が変更されるとの連絡が入り、調査区域外も掘削されることが判明した。市教委と振興局が改めて協議を行い、重機等を振興局が用意して調査を行うこととなり、11月16日に追加の調査を行った。この調査においては遺物が多量に出土した東地区を中心に行うこととなり、結果、遺構の確認は元よりわかっていた溝の延長以外は確認されなかったが、多くの遺物が出土したため、グリッドごとにまとめて記録をし、遺物の採取を行った。

なお、出土遺物については、整理作業員によって現地事務所において水洗・注記作業を行い、基礎整理作業を終了した。平成23年2月24日、発掘調査支援業務受託者の株式会社太陽測地社より測量図など成果品の納入を受け、平成22年度の調査を終了した。出土遺物はコンテナ換算で5箱であった。

この間に、平成23年2月2日付け長教博第324号文書で県教委へ発掘調査の終了を報告、同年2月2日付け長教博第326号文書で遺物発見届を新潟県警与板警察署へ提出したのち、3月24日付け教文第1479号の文書で文化財認定の通知を受けている。

| グリッド | X | Y | 標高 | グリッド | X | Y | 標高 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2C | 175,351.557 | 21,933.219 | 17.906m | 2G | 175,332.369 | 21,968.317 | 17.570m |
| 2E | 175,341.963 | 21,950.768 | 17.742m | 2H | 175,327.572 | 21,977.091 | 17.579m |
| 2F | 175,337.166 | 21,959.542 | 17.536m | 2I | 175,322.775 | 21,985.866 | 17.569m |

第1表　座標値一覧

（3）整理作業

平成23年5月19日、協定書に基づき整理作業に係る費用負担契約を締結し、5月30日より整理作業を実施した。出土遺物の接合・復元・実測、図面デジタルトレース、写真撮影までの諸作業については株式会社太陽測地社に委託し、作業の統括及び報告書の出筆は長岡市教育委員会が行った。

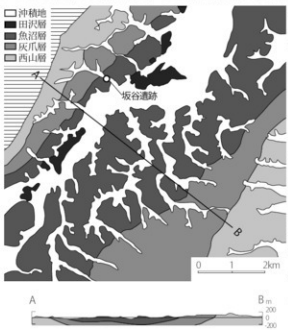
# 第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

## 1　遺跡の位置と地理的環境

坂谷遺跡は新潟県の海岸部中央付近にあたる長岡市両高（和島地域）に所在する。和島地域は旧三島郡北部の海岸寄りにあり、北の長岡市寺泊地域、西の三島郡出雲崎町とともに地元では旧来「西古志」と呼ばれた地域である。和島地域は海岸部から市街地まで約 4 km の位置にあって日本海気候に属し、気候の変化は穏やかで冬季の最大積雪量は多くても 50cm 前後である。旧来の集落は山裾に沿って形成され、丘陵部には人工林や二次林、沖積地の大部分は水田に利用されている。なお、近年では平地部にも市街地が広がりつつある。

周辺の地形は、いくつかの小河川が流れる沖積平野とその東西に連なる低位丘陵からなっている。この丘陵は東頸城丘陵の北端部分にあたり、角田・弥彦山地へつながる海岸部の西側丘陵、与板・三島地域と接する東側丘陵に細分される。これらの地形は「新潟方向」と呼ばれる南南西～北北東の方向性をもって連なっている。これは褶曲作用によって地層の隆起（山）と沈降（谷）が生じた時の皺の方向と考えられる。和島地域では、皺の山部分（背斜軸）と谷部分（向斜軸）が 2 本ずつ確認でき、この皺の方向が丘陵や台地の分布、川の流れ方を支配し、現在に至る地形を成立させたと考えられる。

沖積平野は幅 500m 前後でおよそ 10km 続いたのち、長岡市島崎で幅 2 km 弱に広げ燕市分水地区で新潟平野へと続く。沖積平野を形成したかつての島崎川（以下、「旧島崎川」）は、出雲崎町田中に源を発し燕市牧ケ花で信濃川の支流西川と合流、河口の新潟港へと通じていたが、1922 年（大正 11 年）に信濃川の河川氾濫を防ぐ目的で行われた大河津分水路通水によって分断され、当時盛んであった舟運はこれを機に衰退していった。なお、分水路掘削にて発生した土砂は長岡市寺泊本山の南に存在した円上寺潟の干拓に利用され、昭和 40 年代には完全にその姿を消し乾田化が図られ、今日では大区画の水田が広がっている。また、分水路開通により流量が減った信濃川下流の河川沿いにおいても水田化がなされていった。現在は上流から島崎川、郷本川、新島崎川として完全に分離され、西側丘陵部を開削した放水路から日本海へ注いでいる。



第４図　地質分類図

沖積平野には現在 JR 越後線や一般国道 116 号が縦貫し、柏崎市～新潟市間を結ぶ重要な交通手段を担っている。遺跡は国道 116 号八幡林トンネルの北西約 800 m の場所にあり、郷本川の左岸に連なる丘陵谷部の縁にあたる水田に存在する。遺跡の立地する谷は北西北に深く入り込むもので、遺跡はその谷の入り口であり、周辺の標高はおおよそ 17 ～ 18 m である。また、地元の住民によると調査地付近丘陵裾は一帯湿地帯であったと言われ、今回の調査においてもその痕跡が確認できた。また、この谷部を進むと日本海の海岸に抜けることができ、古くから交通路として利用されてきた。

## 2　周辺の遺跡と歴史的環境

旧島崎川流域では後期旧石器時代から近世に至る遺跡が分布する。遺跡は現集落が立地する東西丘陵の裾部に加え、近年では沖積地でもその存在が確認されつつある。また、この地域は歴史的に見ても周辺地域と密接な関係をもち合っていたことが文献史料などからもうかがわれる。

坂谷遺跡がある東頸城丘陵の北端には特に縄文時代以降に多くの遺跡が存在している。縄文時代には中期を中心として、北野丸山遺跡をはじめ多くの遺跡が丘陵上の平地などに集落を構えた。弥生時代になると丘陵の裾部分に生活痕が推移していっている。上桐神社裏遺跡や大平遺跡、大塚遺跡などでは緑色凝灰岩製の管玉やその未製品が多く表採されるなど玉造りを行っている遺跡が多く、松ノ脇遺跡や大武遺跡、五千石遺跡といった拠点的ともいえる集落遺跡も形成されていった。また、西側の丘陵には奈良崎遺跡が、東側の丘陵には環濠を持つと見られる赤坂遺跡など高地性集落も存在している。集落のみでなく弥生時代後期と見られる方形台状墓の屋敷塚遺跡なども造られ、これらの遺跡から周辺の中心的な地域であったことが見て取れる。

古墳時代になるとこの一帯はさらに栄え、山田郷内遺跡などのように丘陵から突き出た低地丘陵に営む集落のみでなく、扇状地上に形成された下ノ西遺跡や沖積低地上の自然堤防に立地していた門新遺跡などのようにより低地に生活の場を移していっている。これらの遺跡の多くは後の古代まで集落が営まれこの地域の中心的位置を占めていくことになる。また、丘陵上には下小島谷古墳群や横滝山舞台塚などの古墳も造られていった。

古代に入ると「沼垂城」木簡、「郡司符」木簡、奈良三彩などが出土し、大領をあらわす墨書土器も多量に見つかった八幡林遺跡や古代古志郡内で最大の四面庇付建物が検出された下ノ西遺跡など郡衙的役割を持った遺跡が見つかっている。また、鴟尾や軒丸瓦などとともに金堂の基壇が見つかっている横滝山廃寺など、越後国古志郡を理解するために重要な遺跡が多数存在している。このような重要な遺跡が数多く存在するのは、この地が古代北陸道の街道沿いであり、佐渡国に渡るための要衝であったことに起因しているのであろう。このような状況は後の時代にも続き、中世まで一般の集落跡のみならず、多くの行政に関わる遺物を含む遺跡や館跡などが見つかっている。

| No. | 遺跡名 | 時　代 | No. | 遺跡名 | 時　代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 夕暮れの岡 | 古墳～古代 | 16 | 門新 | 古墳～古代 |
| 2 | 竹ヶ花 | 弥生～中世 | 17 | 上新田 | 古墳前期 |
| 3 | 蒲田 | 弥生 | 18 | 上桐神社裏 | 旧石器～中世 |
| 4 | 本山舞台島 | 弥生後期 | 19 | 松ノ脇 | 弥生～古墳 |
| 5 | 草薙 | 縄文晩期～古代 | 20 | 北野大平 | 弥生～古代 |
| 6 | 諏訪田 | 弥生中期～後期 | 21 | 大稲場 | 弥生 |
| 7 | 横滝山 | 縄文～古墳 | 22 | 北野丸山 | 縄文、古墳～古代 |
| | 庚塚 | 古墳 | 23 | 川東 | 弥生～中世 |
| | 横滝山舞台塚 | 古墳 | 24 | 大武 | 縄文～古代 |
| 8 | 蔵地面 | 縄文後期～弥生中期、古代 | 25 | 奈良崎 | 弥生中期～古墳前期、中世 |
| 9 | 野起 | 縄文晩期～古墳前期 | 26 | 姥ヶ入南 | 弥生～古墳 |
| 10 | 五千石 | 縄文後期、古墳～古代 | 27 | 山田郷内 | 古墳～室町 |
| 11 | 古屋敷 | 弥生末～古墳 | 28 | 八幡林 | 古墳～古代 |
| 12 | 五分一稲場 | 古墳前期～中期 | 29 | 大塚 | 弥生 |
| 13 | 大久保古墳群 | 古墳前期 | 30 | 下ノ西 | 古墳～古代 |
| 14 | 屋敷塚 | 弥生後期？ | 31 | 下小島谷古墳群 | 古墳 |
| 15 | 赤坂 | 弥生 | | | |

第２表　周辺遺跡一覧

第５図　縄文時代～古墳時代の旧島崎川流域の遺跡（1:70,000）

# 第Ⅲ章　調査の成果

## 1　調査区の設定（図版１）

試掘調査の結果を基に、ほ場整備事業の水路予定地に調査区を設定した。ただし、中央部に未だ使用中の水路があり、調査ができないためここを境に東側を「東地区」、西側を「西地区」として調査区を設けた。これらの両地区を覆うように、調査区の形状に合わせた 10m 四方の大グリッドを設定し、大グリッド内に２m 四方の 25 個の小グリッドを設けた。

大グリッドは調査区の北西側を基準として、北東から南西に向かって英数字１～３で表し、北西から南東方向に向かってはアルファベット A ～ K で表記し、それぞれをあわせて 1A などと呼称した。また、小グリッドは南西方向を基準として北東方向に数を１～５の小グリッドを設定し、次の列に移り６～ 10 グリッドと続くように設定した。それぞれのグリッドは [ 大グリッド ]-[ 小グリッド ] で表した。例えば、大グリッド 3F の小グリッド 25 は、「3F-25」とした。

## 2　基本層序（図版２）

調査区内の４か所において基本層序を確認し、それぞれ A 地点（3D-3 北壁）、B 地点（3H-25 北壁）、C 地点（3I-5・10 北壁）、D 地点（3H-25 西面）とした。

Ⅰ層　茶褐色土（しまり 弱、粘性 中 -）　表土層
Ⅱa層　茶褐色砂層（しまり 中 +、粘性 弱）　橙色粒子 (0.5 ～ 1mm) 少量
Ⅱb層　茶褐色砂層（しまり 強、粘性 弱）　橙色粒子 (0.5 ～ 3mm) 少量、白色砂ブロック (5mm) 少量を含む
Ⅱc層　灰色砂層（しまり 強、粘性 弱）
Ⅲa層　黒色土層（しまり 中+、粘性 中）　炭化物 (0.5 ～ 5mm) 多量を含む　遺物包含層
Ⅲb層　暗茶褐色砂層（しまり 中+、粘性 中）　炭化物 (0.5 ～ 5mm) 中量を含む　遺物包含層
Ⅳ層　暗灰色砂層（しまり 中-、粘性 弱）
Ⅴ層　暗茶褐色砂層（しまり 中、粘性 弱）　植物遺体を多量に含む
Ⅵ層　暗青灰色砂層（しまり 中+、粘性 中-）　灰色砂ブロック (5 ～ 10mm) 中量を含む　地山層

## 3　遺構（図版３）

調査中にいくつかの形状不明の遺構が確認されたが、その後それらは自然の落ち込みと判明した。これらの落ち込みは丘陵の裾により地形が屈曲する場所、3I-5 グリッド付近などで浅くなり、その周辺は緩やかに深くなっていく。また、2I-17 グリッド付近の落ち込みには巨大な砂岩製の岩石が多数見つかった。地元の住民よると現代に入って湿地帯であった現地の水田化のために埋め立てたことがあるとの話があったため、これらの土地改良の一環においてこの岩石が使用されたものと見られる。2B グリッド以西は粗い砂層が厚く堆積しており、試掘調査においては他のトレンチではこのような砂層は見られなかったため、これらも埋め立てのものと見られる。

今回の調査ではピットが１基、溝が１基検出された。

P1　2J-4 グリッドで検出されたピット。2 層に分かれ、上層には炭化物が微量含まれていた。遺物の出土はなく、時期・用途は不明であった。

SD1　2I-25、2J-4・5・9 グリッドで確認された、内部にピット状の落ち込みを 2 か所持つ溝。土師器の小破片が出土したが、時期を特定できず、時期・用途は不明であった。

## 4　遺物（図版 4 ～ 6）

坂谷遺跡ではテンバコで 5 箱分の遺物が採集でき、それらの多くはⅢａ～Ⅲｂ層の遺物包含層にて出土した。上記のとおり遺構内からはほとんど遺物が見つからなかったが、自然の落ち込み内でまとまって遺物が出土した。これらの遺物のまとまりは 5 箇所において確認でき、それぞれ第 1 ～第 5 遺物集中区と呼称したい。以下にそれぞれの集中区ごとに事実記載を行う。

**第 1 遺物集中区**　3F-20・25 グリッドにて確認された。遺物量は後述する第 2 ～第 4 遺物集中区ほど多くはなかったが、特徴的な遺物が出土している。1 は小型丸底壺で、全体が丁寧に篦磨きされている。口縁部から胴部下半までが残存し底部は検出されなかった。2 は高坏と見られる土器の脚部。丁寧な篦磨きがなされ、内部は中実であった。

**第 2 遺物集中区**　3G-9・14・19・20・25 グリッド付近で確認された。3、4 は頸部が「く」の字に屈曲し、内外面刷毛目により調整されている甕。5 は口縁部が外反し、口唇部が面取りされた甕。6 は有段の口縁を持つ甕。5、6 いづれも口縁部のみの出土で胴部は見つかっていない。7 ～ 9 は甕の底部で、7 は底面を刷毛状工具により調整がなされている。10 は屈曲が弱いもののく字状の頸部をもつ壺で、内外の頸部に指頭圧痕が見られ、口縁部には輪積みの接合痕を残す。11 は有段の口縁を持つ壺。胴部の外面は刷毛目がなされ、内面には篦ナデにより調整されている。12 は甕底部で、丁寧な篦ナデが施されている。13 は逆八の字状に開いた鉢で、全体に細かな刷毛目がなされ、その下から篦ナデが見られる。14 は半分に割れているが、敲石と見られる石器。

**第 3 遺物集中区**　2H-11、3H-14・15 グリッド付近にて出土した。15 ～ 17 はく字状の頸部を持つ甕。外面は刷毛目により調整され、口縁部にはナデにより整形がなされる。内面は 15 や 17 のように刷毛目によるものと、16 のように篦ナデにより調整されたものとがある。16 は頸部内面に一部指頭圧痕が見られる。18 は甕胴部片で、篦削りがなされる。19、20 は甕底部片で、外面には煤が付き、19 においては内面に焦げ目が付く。21 は壺の口縁部で外面は細かな篦磨きがなされ、胴部は存在しないが、接合部には輪積み痕が見られる。

**第 4 遺物集中区**　2I-6 グリッド付近にて出土した遺物。22 ～ 24 はく字甕で胴部は刷毛目調整され、口縁部はナデ調整がなされる。内面は篦ナデもしくは刷毛目がなされる。23 には頸部に輪積みの痕跡が見られる。25 と 26 は底部が出土していないが胴部が球形となる壺で、内外面ともに刷毛目を施した後、丁寧な篦磨きを全面に行っている。26 の口縁部は欠損しているが、25 同様に外面はナデにより仕上げがなされていたと思われる。27 は外面が篦削りされた鉢で、内面には篦状工具の使用の痕跡が見られる。

**第 5 遺物集中区**　1J-16 グリッド付近にて出土した。28 は小型甕の口縁部から胴部上半の破片。胴部の調整は磨耗しているため判然としないが、口縁部は丁寧なナデにより内外面ともに仕上げられている。29 は底部が欠損しているため全体がわからないが、皿類の口縁部。30 は皿で、底部は磨耗しているが糸切りの痕跡が見られる。29、30 ともにロクロ成形されている。

# 第Ⅳ章　まとめ

今回の調査で検出されたP1およびSD1ともに時期や遺跡の性格がわかるような遺物は見つからなかった。調査区全体を見ると自然の落ち込みが存在し、一部において落ち込みが浅くなる状況が見て取れた。試掘調査の時の土層観察からも「湿地帯を形成する一方洪水を繰り返した状況が想像される」（丸山2010）と指摘されていたが、同様の状況が本調査での地層にも見られた。出土した遺物はこのような洪水などの影響により形成されたと見られる落ち込みが浅くなるような境目に集中的に出土しており、周辺に存在した集落などから洪水により集まったものもあると思われる。

出土した土器は甕を中心に、壺や鉢などが出土した。甕のうちその口縁部形状がわかるもの多くは所謂「く字甕」と呼ばれるもので、口唇部に向けては緩く外反し端部は丸くなるものである。外面は刷毛目調整が施されるものが大半で、底部は平底、丸底の両方が見られる。頸部の屈曲は3や17、22のように屈曲がはっきりとしているものが多いが、4のように屈曲が弱まっているものも見られた。このような甕は弥生時代終末から古墳時代中期にかけて見られ、2005年に行われたシンポジウム『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』にて提唱された6期～9期に相当すると見られる（品田1999、相田2005、滝沢2005）。また、甕には5のうように口唇部が面取りされたものや有段の口縁のものなども出土しており、同時期の所産と見られる。壺は装飾されたものはなく、小型の丸底の壺である1などは甕よりも若干時期が新しいと見られるが、有段の口縁を持つ11など甕とほぼ同じ時期のものが出土している。2は脚部のみの出土で高坏と見られるが、この時期の高坏の脚部は中が空洞となるため、高坏以外の脚部や他地域のものの可能性もある。

また、第5遺物集中区にて検出された皿などは中世の所産のものであった。近隣の山田郷内遺跡などでも出土しており（長岡市教委2007）、11世紀末から12世紀頃のロクロを使用した皿類である。28の小型甕はそれらの時代と異なり、古代の所産と見られる。

以上のように、今回の調査では古墳時代前期～中期と、平安時代の遺物が出土した。これらは、当遺跡を最初に発見した寺村光晴の資料とも合致している（寺村1950）。周辺の丘陵の傾斜はきつく、また丘陵の頂も踏査したが、遺跡の痕跡はなかった。よって、同時代の生活跡が近隣にあることが想定され、今後の調査においては調査範囲にもよるが、それらが見つかる可能性が高いと思われる。

【引用・参考文献】

相田泰臣　2005「信濃川左岸地域の様相」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第1分冊）』

品田高志　1999「柏崎平野の土器編年」『新潟県の考古学』

滝沢規朗　2005「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第1分冊）』

寺村光晴　1950　島田村史第1集『夕陽の長者—有史以前の島田村と傳説—』

長岡市教育委員会　2007『山田郷内遺跡——一般国道116号和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』

丸山一昭　2010「4　坂谷遺跡確認調査」『平成21年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』

土器

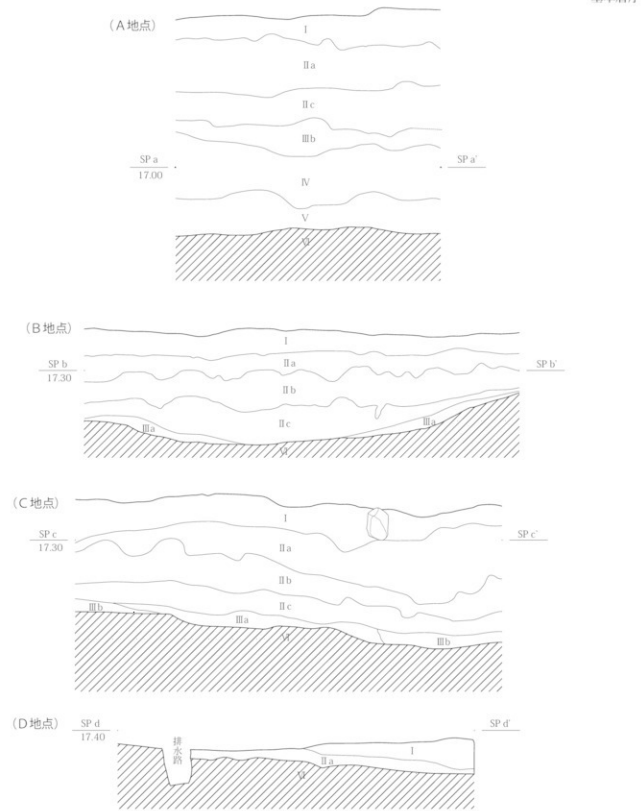
| No. | 集中区 | 出土位置 | 時代 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調(外) | 色調(内) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 3F-20・25 | 古墳 | 土師器 | 小型壺 | 9.0 | (6.0) | - | 砂粒 | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | |
| 2 | 1 | 3F-20・25 | 古墳 | 土師器 | 高坏 | - | - | - | 砂粒 | 浅黄橙色 | - | |
| 3 | 2 | 3G-9・14 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 16.6 | (24.5) | (4.5) | 砂粒、赤色粒子 | 明褐灰 | にぶい黄橙 | |
| 4 | 2 | 3G-9・14 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 14.6 | (7.8) | - | 砂粒 | 灰白 | 灰黄 | |
| 5 | 2 | 3G-25 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 17.3 | (5.6) | - | 砂粒 | 淡黄色 | にぶい黄橙色 | |
| 6 | 2 | 3G-4 | 古墳 | 土師器 | 壺 | 15.0 | - | - | 砂粒、赤色粒子 | にぶい橙色 | にぶい橙色 | |
| 7 | 2 | 3G-9・14 | 古墳 | 土師器 | 甕 | - | - | 5.2 | 砂粒 | 明褐灰色 | にぶい橙色 | |
| 8 | 2 | 3G-19・20・24・25 | 古墳 | 土師器 | 甕 | - | - | 3.8 | 砂粒 | にぶい黄橙色 | 褐灰色 | |
| 9 | 2 | 3G-24 | 古墳 | 土師器 | 甕 | - | - | 4.0 | 砂粒、海綿骨片、赤色粒子 | にぶい橙色 | 灰褐黄色 | |
| 10 | 2 | 3G-9・14 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 14.0 | (8.8) | - | 砂粒、海綿骨片 | 淡黄色 | 浅黄色 | |
| 11 | 2 | 3G-24・25 | 古墳 | 土師器 | 壺 | 15.0 | (14.9) | - | 砂粒 | 浅黄橙色 | にぶい黄橙色 | |
| 12 | 2 | 3G-25 | 古墳 | 土師器 | 壺 | - | - | 6.4 | 砂粒 | にぶい黄橙色 | 黄灰色 | |
| 13 | 2 | 3G-9・14 | 古墳 | 土師器 | 鉢 | 28.6 | 12.0 | 8.5 | 砂粒 | にぶい橙色 | にぶい黄橙色 | |
| 15 | 3 | 2H-11、3H-15 | 古墳 | 土師器 | 甕 | (17.6) | - | 2.1 | 砂粒、海綿骨片 | 褐灰色 | 褐灰色 | |
| 16 | 3 | 3H-14・15 | 古墳 | 土師器 | 甕 | - | (24.9) | 4.4 | 砂粒、海綿骨片 | 明褐灰色 | 明褐灰色 | |
| 17 | 3 | 3H-25 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 15.3 | (15.0) | (5.0) | 砂粒、海綿骨片 | にぶい橙 | にぶい橙 | |
| 18 | 3 | 3H-25 | 古墳 | 土師器 | 甕 | - | - | - | 砂粒 | 灰褐色 | 褐灰色 | |
| 19 | 3 | 3H-14・15 | 古墳 | 土師器 | 甕 | - | - | 2.8 | 砂粒 | にぶい黄褐色 | にぶい黄褐色 | |
| 20 | 3 | 3H-14・15 | 古墳 | 土師器 | 甕 | - | - | 2.2 | 砂粒、海綿骨片 | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | |
| 21 | 3 | 3H-15 | 古墳 | 土師器 | 壺 | 11.2 | 5.4 | - | 砂粒、海綿骨片、赤色粒子 | 浅黄色 | にぶい黄橙色 | 輪積み痕 |
| 22 | 4 | 2I-1、3I-5・10 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 15.8 | (15.0) | - | 砂粒、海綿骨片 | 褐灰 | 白灰 | 部分的に被熱による剥離 |
| 23 | 4 | 2I-6 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 15.0 | (8.2) | - | 砂粒 | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | |
| 24 | 4 | 2I-6 | 古墳 | 土師器 | 甕 | 17.9 | (8.8) | - | 砂粒 | にぶい橙 | 浅黄橙 | |
| 25 | 4 | 2I-1・6・11 | 古墳 | 土師器 | 壺 | 12.5 | (21.4) | - | 砂粒、海綿骨片 | にぶい黄橙 | 浅黄 | |
| 26 | 4 | 2I-6、3I-10 | 古墳 | 土師器 | 壺 | - | (29.0) | - | 砂粒、海綿骨片 | にぶい黄橙 | 褐灰 | |
| 27 | 4 | 2I-1・6・11、3I-10 | 古墳 | 土師器 | 鉢 | 23.0 | (18.7) | - | 砂粒、海綿骨片 | にぶい黄橙 | 浅黄 | |
| 28 | 5 | 1J-11・16 | 平安 | 土師器 | 小型甕 | 12.0 | - | - | 砂粒、海綿骨片 | 灰褐色 | にぶい橙色 | |
| 29 | 5 | 1J-16 | 平安 | 土師器 | 皿類 | 13.0 | - | - | 砂粒、海綿骨片、赤色粒子 | にぶい褐色 | にぶい黄橙色 | |
| 30 | 5 | 1J-16 | 平安 | 土師器 | 皿 | 8.6 | 2.6 | 4.5 | 砂粒、海綿骨片、赤色粒子 | 橙色 | 橙色 | |

石器

| No. | 集中区 | 出土位置 | 時代 | 種別 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 4 | 3G-9 | 不明 | 石製品 | 敲石 | 9.5 | 6.8 | (3.35) | 225.3g | |

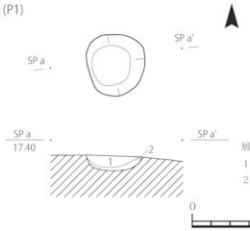
第３表　遺物観察表

+175,370
+175,360
+175,350
+175,340
+175,330
+175,320
+175,310
+22010
+22000
+21990
+21980
+21970
+21960
+21950
+21940
+21930
+21920
+21910
20m
(1:400)
【西地区】
【東地区】
SP a
SP a'
SP b
SP b'
SP c
SP c'
SP d
SP d'
P1
(1A)
(1B)
(1C)
(1D)
(1E)
(1F)
(1G)
(1H)
(1I)
(1J)
(2A)
(2B)
(2C)
(2D)
(2E)
(2F)
(2G)
(2H)
(2I)
(2J)
(3A)
(3B)
(3C)
(3D)
(3E)
(3F)
(3G)
(3H)
(3I)
(小グリッド配置)
5 10 15 20 25
4 9 14 19 24
3 8 13 18 23
2 7 12 17 22
1 6 11 16 21



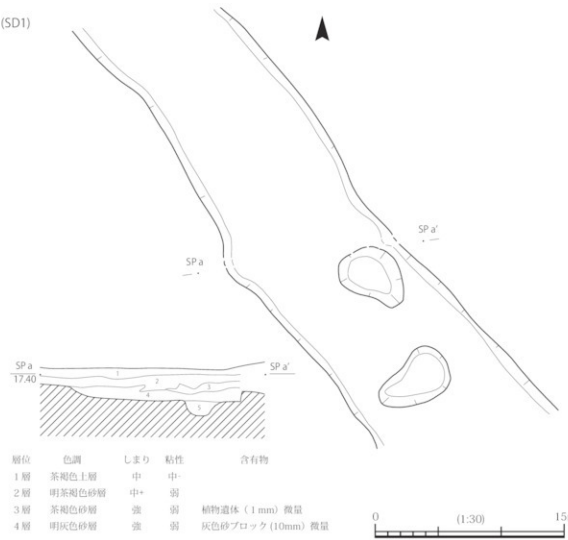

| 層位 | 色調 | しまり | 粘性 | 含有物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 茶褐色土 | 弱 | 中 | | 表土層 |
| Ⅱa | 茶褐色砂層 | 中+ | 弱 | 橙色粒子 (0.5 ～ 1mm) 少量 | |
| Ⅱb | 茶褐色砂層 | 強 | 弱 | 橙色粒子 (0.5 ～ 3mm) 少量<br>白色砂ブロック (5mm) 少量 | |
| Ⅱc | 灰色砂層 | 強 | 弱 | | |
| Ⅲa | 黒色土層 | 中+ | 中 | 炭化物 (0.5 ～ 5mm) 多量 | 遺物包含層 |
| Ⅲb | 暗茶褐色砂層 | 中+ | 中 | 炭化物 (0.5 ～ 5mm) 中量 | 遺物包含層 |
| Ⅳ | 暗灰色砂層 | 中 | 弱 | | |
| Ⅴ | 暗茶褐色砂層 | 中 | 弱 | | 植物遺体層 |
| Ⅵ | 暗青灰色砂層 | 中+ | 中 | 灰色砂ブロック (5 ～ 10mm) 中量 | 地山層 |

(P1)




| 層位 | 色調 | しまり | 粘性 | 含有物 |
|---|---|---|---|---|
| 1層 | 暗褐色土 | 中+ | 弱 | 炭化物（1mm）微量 |
| 2層 | 暗茶褐色土 | 中- | 中 | 砂粒（0.5mm）中量 |

(SD1)

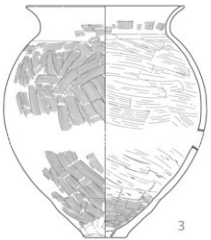


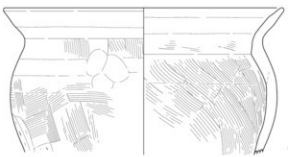

| 層位 | 色調 | しまり | 粘性 | 含有物 |
|---|---|---|---|---|
| 1層 | 茶褐色土層 | 中 | 中- | |
| 2層 | 明茶褐色砂層 | 中+ | 弱 | |
| 3層 | 茶褐色砂層 | 強 | 弱 | 植物遺体（1mm）微量 |
| 4層 | 明灰色砂層 | 強 | 弱 | 灰色砂ブロック（10mm）微量 |

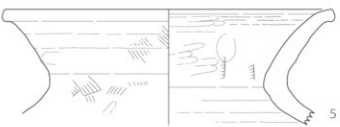
出土遺物（第１遺物集中区、第２遺物集中区）

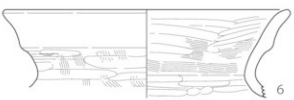
（第１遺物集中区）

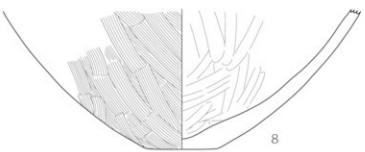
（第２遺物集中区）

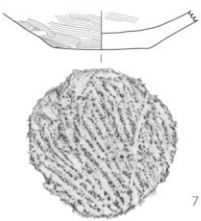


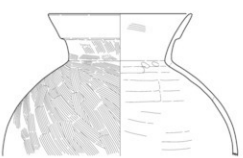



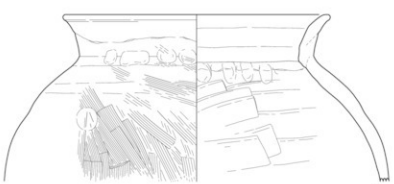



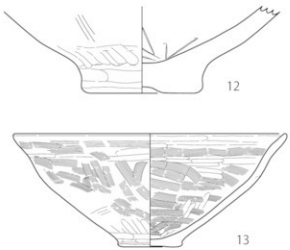



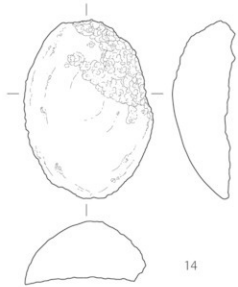


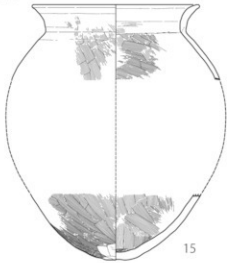

（3・11）0 (1:4) 20cm

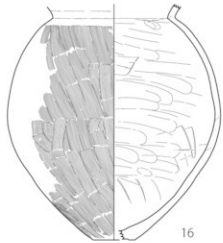
0 (1:2) 10cm

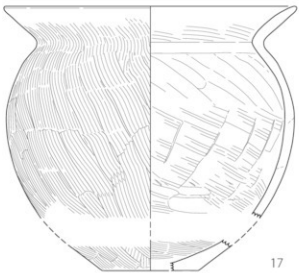


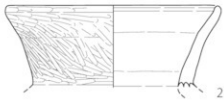




（第３遺物集中区）



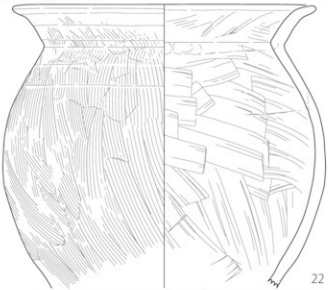



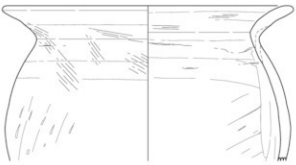


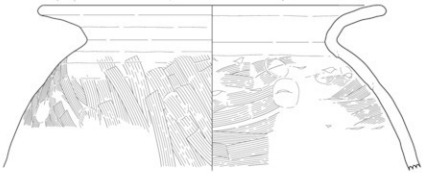

（13・15・16）　0　(1:4)　20cm

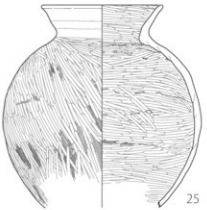
0　(1:2)　10cm

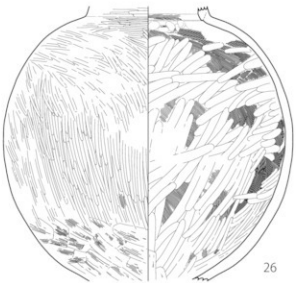
（第4遺物集中区）

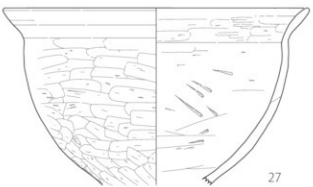

22


23


24

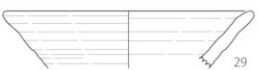

25


26


27

（第5遺物集中区）

28


29

30

（25・26・27）　0　(1:4)　20cm

0　(1:2)　10cm

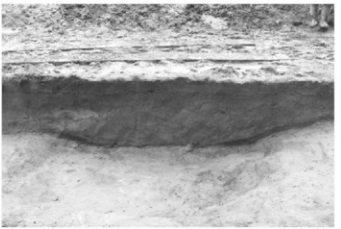
調査区全景（北から）

調査区全景（東から）

調査区　東地区全景（北から）

調査区　西地区全景（北から）

基本層序（A地点）


基本層序（B地点）

基本層序（C地点）

基本層序（D地点）

遺物出土状況（3G-4）

遺物出土状況（3G-9）

遺物出土状況（3G-9）

遺物出土状況（3H-20）

遺物出土状況（3H-25）

遺物出土状況（3I-5）

SP1 土層断面

SD1 土層断面

東地区完掘状況（北から）

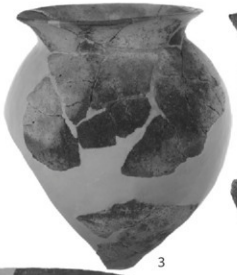
東地区完掘状況（北から）

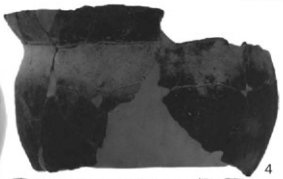
西地区完掘状況（北から）

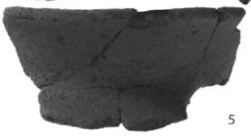
西地区完掘状況（北から）

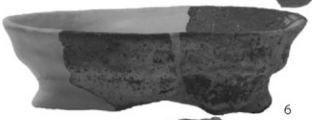
1

2

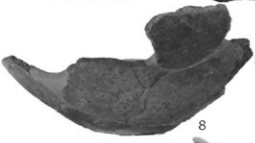

3


4

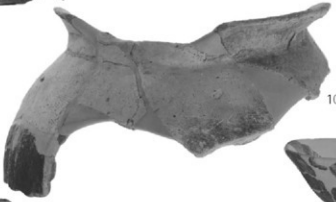

5

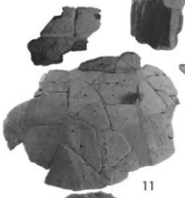

6

7

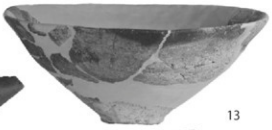

8

9

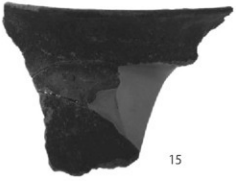

10

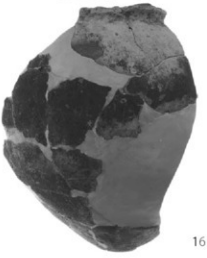

11

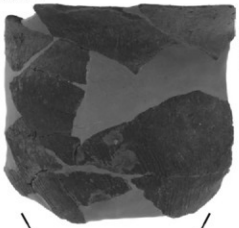
12

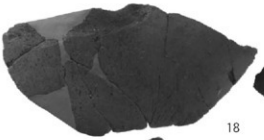

13

14

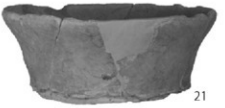
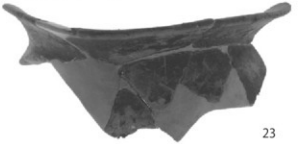

15

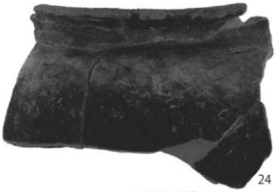

16



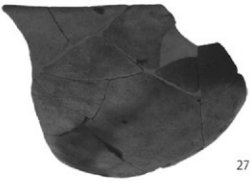
17

18

20

19

21

23

22

24

25

26

27

28

29

30

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | さかやいせき |
| 書　　名 | 坂谷遺跡 |
| 副 書 名 | 県営ほ場整備事業（保内地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 編 著 者 名 | 小林　徳 |
| 編 集 機 関 | 長岡市教育委員会 |
| 所 在 地 | 〒940－0072　新潟県長岡市柳原町２番地１　　TEL　0258-32-0546 |
| 発行年月日 | 平成 24（2012）年１月６日 |

| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | （世界測地系） | | | | |
| 坂谷遺跡（さかやいせき） | 新潟県長岡市両高（にいがたけんながおかしりょうたか） | 15021 | 829 | 37°57'69" | 138°74'86" | 20100722～20101116 | 200㎡ | ほ場整備事業 |

| 所有遺跡名 | 種別 | 時期 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 坂谷遺跡 | 遺物包蔵地 | 古墳時代 | 溝、ピット | 土師器、甲石 | |
| | | 平安時代 | | ろくろ皿 | |


坂谷遺跡

－県営ほ場整備事業（保内地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 24（2012）年１月６日　印刷
平成 24（2012）年１月６日　刊行
発行　長岡市教育委員会
印刷　株式会社　サンワプロセス